

土地や集落を守る城郭の変遷に関する研究

佐々木 勇

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第64号改訂版抜刷）

土地や集落を守る城郭の変遷に関する研究

A History of Castles as a Protector of Fields and Houses

佐々木 勇

キーワード：環濠集落、朝鮮式山城、山城、平山城、平城、琉球王国のグスク

1 はじめに

小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 社会編の6年生の社会科の目標では、資質・能力の育成を目指すために、3つの目標の中の一つに歴史学習がある^①。そして、我が国の歴史や伝統を大切に国を愛する心情を養うというようになっている。「我が国の歴史上の主な事象」とは、我が国の歴史上でそれぞれの時期に、大きな影響を与えた事象のことである^②。知識・技能の内容に含まれ、「何を知っているか 何ができるか」ということである。これらを基に、理解し、学び、まとめることができるような、資料の作成と収集に努めてきたのが本稿である。

かつて、弥生時代は米が主食であった。そして、当時の人々は「かしら」を中心にして、米作りを行い、「むら」ができあがってきた。吉野ヶ里遺跡は、豪族となった王が現れた様子がよくわかる遺跡である。

飛鳥時代は、次第に政治の仕組みが整えられてくる。そして、有力な豪族は貴族となって、大和朝廷の重要な役職について政治を行うようになった。

奈良時代は、乱れた世の中を立て直そうと聖武天皇が都に東大寺を建て、全国には国分寺と国分尼寺を建てた。そして、農民は都に行き工事をしたり、兵士として九州沿岸の守りについたりした。

平安時代は、日本独自の新しい文化が生まれてくる。寝殿造りの屋敷を造るなど、豊かな暮らしをする者も現れてきた。一方、この頃の終わりごろから、武

芸を専門とする武士が出てきた。また、朝廷の警備や貴族を守る役目に就く者も出てきた。

鎌倉時代は武士の争いが起こり、源頼朝が鎌倉幕府を開く。家来となった御家人を地方の守護や地頭にし、地方へ力を及ぼすようにする。御恩と奉公によって強い結びつきをつくった。

室町時代になると、今に伝わる文化が生まれてきた。そして、11年もの長期にわたって争う応仁の乱が始まる。この応仁の乱が引き金となって、室町時代から「下克上」の戦国時代へと入った。

こうして戦国時代は、山城をはじめとする多くの防御施設が全国に造られる。その後、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康によって天下が統一され、安定した時代を迎えた。表1は、こうした歴史上の土地や外敵から守る城郭などの施設について、比較検討しようとしたものである。

表1 城郭概要一覧表

弥生時代	各地に、環濠集落が造られる。
古墳時代	豪族が、堀を巡らせた館を造る。
飛鳥・奈良時代	瀬戸内海沿岸に、古代山城が築かれる。
平安時代	東北地方に、環濠遺跡・城柵が造られる。
鎌倉時代	元寇に対応し、幕府が石塁を築く。南北朝の乱が始まり、山城が現れる。
室町時代	享徳の乱・応仁の乱が起こる。
戦国時代	全国に、城や陣が多く造られる。
安土・桃山時代	全国に、多くの城が造られる。
江戸時代	1615年に、一国一城令が出される。

出所：西股総生『【図説】日本の城最新講座』2018年、p.25、「ざっくり日本城郭史」より作成。

2 弥生時代の環濠集落・吉野ヶ里遺跡

1952年（昭和27年）に、佐賀県神埼郡吉野ヶ里町三津永田遺跡から、多数の甕棺墓や人骨が見つかり、発掘調査が進んだ。1989年（平成元年）2月には、「魏志倭人伝の卑弥呼が住んだ集落」「邪馬台国時代のむら」などというニュースが大々的に報道された。

報道後の発掘現場を訪ねると、田の中に甕棺や住居跡・土器等が発掘された跡があり、多くの見学者が訪れていた。この時の発掘では、まだ多くの環濠集落の跡は発見されてはいなかった。

そして、30年後に訪ねた際の様子が、図1である。現在、「吉野ヶ里歴史公園」として整備されている。今から約2千年前の吉野ヶ里遺跡は、弥生時代を代表する遺跡であった⁽³⁾。米作りが中国や朝鮮半島から伝わり盛んになると、土地の開墾や水利権争いなどが発生し、むら同士の戦いが発生した⁽⁴⁾。

そのために、図1のように外敵からむらを守るために、侵入者が乗り越えられないような深い堀を巡ら



図1 外環濠の堀と城柵、逆茂木（H28.3.9撮影）

し、城柵を設けて逆茂木を設置した。また、重要な場所には物見櫓が建てられていた⁽⁵⁾。しかし、外部との戦いから、甕棺の中には矢じりが刺さった人骨や、頭部のない人骨などが多数発見されている⁽⁶⁾。この頃の弥生時代前期後半から中期中頃は、低地への進出があったことや、水田の開墾とそれに起因する水利争いが組織的に発生した様子が見られる⁽⁷⁾。

そして、集落が統合され、首長の誕生と、祭事をす



図2 復元された大型建物（主祭殿）と物見櫓（H28.3.9撮影）

る身分の高い人々の住まいと考えられるのが、図2の大型建築物（主催殿）や、それを守る物見櫓である⁽⁸⁾。

3世紀後半頃、吉野ヶ里遺跡全体を取り囲む環濠はほぼ埋没してしまい、機能が失われていく⁽⁹⁾。弥生時代の終焉と共に集落は解体されていった⁽¹⁰⁾。表2は、吉野ヶ里遺跡関連の出来事をまとめたものである。

表2 吉野ヶ里遺跡関連年表

年代	時代	主な出来事
紀元前3世紀	弥生時代前期	遺跡南端周辺でむらができる。 遺跡の丘陵南部分に環濠集落ができる。むらからくに発展する。
紀元前1世紀	弥生時代中期	丘陵の各所で、多数列状に甕棺墓により埋葬される。 丘陵の南部で、青銅器等の铸造が行われる。 北墳丘墓が築かれ、有柄銅剣やガラス管玉などが副葬品として埋葬される。 南墳丘陵では祭壇のようなものが築かれ、祭祀が行われる。
紀元後1世紀		大規模環濠集落が成立する。
2世紀	弥生時代後期	内壕を掘削して南内郭ができ、物見櫓が建てられる。 魏志倭人伝によると、この頃倭国が乱れ、その後卑弥呼が出てくる。 南内郭と北内郭ができる。 大型建物が建てられ、最盛期を迎える。
4世紀	古墳時代	丘陵上に前方後方墳、方形周溝墓が造られる。

出所：佐賀県教育委員会『弥生時代の吉野ヶ里』2014、p.46、「吉野ヶ里遺跡関連年表」より作成。

3 飛鳥時代の古代山城・鬼ノ城

古代山城は、「こだいさんじょう」とも読まれる古代日本の山城である⁽¹¹⁾。図3からもわかるように、九州地方の北部から瀬戸内海沿岸・近畿地方に分布している。飛鳥時代から奈良時代頃に西日本の沿岸の山上に築造された、防衛施設の総称となっている⁽¹²⁾。その箇所は、27カ所に及ぶ。これらは「朝鮮式山城」「神籠石」と呼ばれてきたが、近年の発掘調査によるとその区別は明確でなく、総称して「朝鮮式山城」と言われる⁽¹³⁾。

この時代は中国は「唐」、朝鮮半島は北から「高句麗」「新羅」「百濟」であったが、天智天皇の時代（663年）の白村江の戦いで、倭軍は唐・新羅連合軍に敗北した。この敗北により、倭軍は朝鮮半島から撤退したが、大和朝廷は倭の国の防衛のために、対馬から畿内に至る要衝に防衛施設を築いた⁽¹⁴⁾。

本稿では、その中でも岡山県総社市にある「鬼ノ城」を取り上げる。この山城跡が本格的に発掘調査がされたのは、1978年（昭和53年）である。それ以来、何回か調査が行われているが、山腹、谷、尾根の傾斜面に累状遺構が築かれており、総延長は2.8kmにも及ぶ⁽¹⁵⁾。面積は約30haあり、城門は東西南北4カ所と、6つの水門がある⁽¹⁶⁾。図4は、鬼ノ城全図だが、山上の深い谷や崖を利用した要害である。等高線の様子から見ても急勾配で、難攻不落の城であることがわか

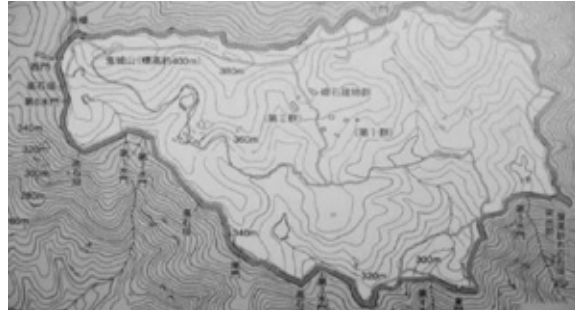


図4 鬼ノ城全図

出所：総社市教育委員会『甦った天空の城 鬼ノ城』2013、p.3「鬼ノ城とは」より転載。（総社市教育委員会より許諾を得ている）

る。図5は、平地と山上から見たものである。平地は、当時海であり、写真とはかなりの高低差がある。



図5 鬼ノ城を平地と山上から見たもの (H30.10.20撮影)



図3 古代山城の分布図

出所：総社市教育委員会『甦った天空の城 鬼ノ城』2013、p.2「古代山城とは」より転載。（総社市教育委員会より許諾を得ている）

(1) 鬼ノ城の門

鬼ノ城への出入り口である城門は、正面側に東・南・西門の3つの城門と、北側に北門の4つの門がある。

この中で、一番規模の大きいのが西門である。図6は西門の復元したものと、南門跡である。南門は大規模な門であり、本柱の最大は門礎の加工から、一辺の最大が約60cmもの角材からできている⁽¹⁷⁾。

出入り口の奥の両側は石垣となっており、ほとんど開かない直線的なものとなっていて、目隠し塀があり、敵兵の侵入をさせない工夫がしてあることがわかる。



図6 復元された西門と、南門跡 (H30.10.20撮影)

(2) 鬼ノ城の城壁

鬼ノ城は、鬼城山の8～9合目の所にあり、全体の長さは2.8kmにも及ぶ⁽¹⁸⁾。そのうち土塁(版築土塁)が9割を占めており、1割が石垣である⁽¹⁹⁾。この工法は、古来より中国や日本でも、よく使われていた工法である。瀬戸内海沿岸は花崗岩質の真砂土が多いので、これを有効に使っていると考えられる。

板枠を組み、中に土を入れて何層にも突き固めた土塁がほとんどである。城壁は平均して下の幅は約7m、上の幅は約6m、高さ約6m、傾斜が約75°という壮大なものである⁽²⁰⁾。

図7は、石垣と版築土塁の組み合わせだったものと、城壁の上部とそこにある板塀である。現在ではかな



図7 石垣と版築土塁 (H30.10.20撮影)

りの土を雨が流しているが、約1400年経過しても急な崖や断崖絶壁がよく残っているのが不思議である。

(3) 鬼ノ城の石垣と水門

鬼ノ城の石垣には、図8のように乱積みや布積みが見られる。これらの石垣は、朝鮮式山城の様式が取り入れられているように見える。本場・韓国の朝鮮式山城の石垣はとにかく高い⁽²¹⁾。また、大きな石ではなく、一定の大きさの石で、きめ細かく積まれているのに驚く。このような積み方が、鬼ノ城においても工法に取り入れられていると考えられる。



図8 鬼ノ城に見られる石垣積みの工法 (H30.10.20撮影)

広大な城域なので、谷筋から水が流れる。そのために、前述した6つの水門が背後の谷にたまった雨水を、排水する。

(4) 鬼ノ城の敷石

図9の鬼ノ城山の敷石は、日本の古代山城には見られないものであり、古代山城のモデルである朝鮮半島でも、類例がないようである⁽²²⁾。アプライトという細粒の等粒状組織を有する火成岩で、半花崗岩と言われる岩石が通路に敷き詰めてある⁽²³⁾。幅は約1.5mで、場所によっては二列や三列にもなっているところもある。城壁の外側は前の方に下がり、内側は場内の方に下がっているので、雨水の流れを考慮したものと考えられる。



図9 敷石の様子 (H30.10.20撮影)

4 鎌倉時代以降の城

(1) 地形を生かした要塞としての山城

城郭の変遷と仕組みを見ると、古代の城は土を盛っているのが城であり、つまり「土+成」である⁽²⁴⁾。平地では、当然外敵から身を守らなければならない。そのためには堀を掘る。そして、掘った土を居住区の周りに盛る。堀の中に水が入っていなければ空堀であるし、水が入っていればいわゆる水堀である。

中世の城は、「鎌倉期の武士の館」と「南北朝期の城」に分けることができ、城の特徴や形態が次第に変遷してくる⁽²⁵⁾。

鎌倉時代末期には、楠木正成が後醍醐天皇の鎌倉幕府倒幕計画に参加し、河内の国で赤坂・千早城の合戦が起きた。この戦いは、今までの発想にはない戦略があった。山城に立て籠もって下に石や丸太、熱した水や油、糞尿を投げつけるという作戦を取る、逃げ込むための城から、立て籠もりをする籠城戦の城となっていく⁽²⁶⁾。図10～13のような山や崖を利用し、麓からの比高を利用する山城が、戦国・安土桃山時代まで続く。



図10 岡山県美作市・三星城 (H27.10.3撮影)



図11 岡山県美作市・林野城 (H27.10.3撮影)



図12 兵庫県佐用郡・利神城 (H27.10.3撮影)



図13 兵庫県朝来市・竹田城 (H27.10.3撮影)

岡山県北の美作地方には、3,000以上の山城が確認されている。中でも、図14の岩屋城は中国地方でも有数の山城であり、1441年（嘉吉元年・室町時代）



図14 岡山県津山市・岩屋城 (H29.11.12撮影)

頃山名教清が築城し、以来赤松、浦上、尼子、宇喜多、毛利氏により支配され、1590年（天正18年）に野火により消失した⁽²⁷⁾。12本もの畝状の連続した堅堀、尾根を掘って敵の侵入を止める大堀切、馬場跡などがよく残っている。

城の形態と特徴をまとめてみると、土木建築技術が発達するにつれて、次第に複雑堅固のものとなってきたのがわかる。山城は山の高さを利用して、防御のために築いた城である。独立した山や連なった山もある。麓からの高さが、100mを越すものが山城と言われている⁽²⁸⁾。

城を守る最重要施設は、防衛拠点としての出入口である。ここは虎口⁽²⁹⁾とも言われ、この場所が攻める側にも、守る側にも重要な場所となる⁽³⁰⁾。形状としては枡形、馬出し、丸馬出し、角馬出しなどを取り入れて、城の出入り口を守る⁽³¹⁾。このように、城を守るさまざまな工夫が取り入れられている。

図15は、臥牛山（標高約480m）を中心として全域に築かれた備中松山城である。現存する天守閣がある



図15 岡山県高梁市・備中松山城 (H29.10.29撮影)

高さが、日本一と言われるほど高い山城である⁽³²⁾。全山が要塞ようになっており、「天空の山城」のように頂上からの眺めはよいが、坂は急峻で登城するには大変な城である。

(2) 戦乱の時代の平山城、平城

平山城は、山城と平城が重なったものをいう。低い山とか丘を利用したもので、地形を巧みに取り入れているのが特徴である。

ここで、石垣積みについて見ると、5世紀の終わりから6世紀にかけて、朝鮮半島より移り住んだ渡来氏族に石工技術に秀でた氏族が、近江の西国（現滋賀県大津市坂本）に住んだ⁽³³⁾。そして、この辺り一帯で、石工の技術を伝授したのが「穴太氏族」と言われている。織田信長は、それまでの穴太の石工職人に役職を与え、「穴太方」「穴太役」「穴太頭」を、そして、そのすべての石工職人を総称して、「穴太衆」と呼んだ⁽³⁴⁾。信長が築いた安土城は全山が石で築かれており、その石垣を積んだ石工職人の穴太衆の名は全国に広まっていき、各地の築城の際の石組みで高い評価を得ている⁽³⁵⁾。

粟田純司氏⁽³⁶⁾によると、津山城も穴太衆の石工職人が石垣を築いていると言う。築城後も津山に残った者もあり、その後も石垣の工事に携わったということである。穴太衆石積みの特徴は次の通りである。

- ①自然石をほとんど加工しないで積み上げる。地表や地中に埋もれている状態の石を使う。
- ②石面より石控えを長くする。
- ③石の合端は、1番より2番で合わせる。(石の出っ張りではなく、前から2番目の接点のこと)
- ④鎧のように据え付ける。
- ⑤裏込め栗石は、丁寧に手詰めで行う。
- ⑥介石は石尻と石控えを長くする。

(穴太衆石垣石積継承者 粟田家14代当主 粟田 純司氏の講演資料より一部抜粋したもの)

石垣構築の技術書として、細川家の穴太の北川作兵衛、加賀藩主に代々仕えた穴太の後藤家のものなどが知られる⁽³⁷⁾。

図16は福知山城で、丹波を平定した明智光秀が築城



図16 京都府福知山市・福知山城 (H29.1.1撮影)

した。治世に反抗した寺社を打壊し、足りない石垣石に墓石などを利用した、転用石がよくわかる⁽³⁸⁾。丘陵(標高約40m、幅約100m)にあり、大小の自然石が使われて、「穴太積み技法」により積まれている⁽³⁹⁾。近隣に石材がない場合や足らなくなった際には、図17のように転用石(てんようせき・てんよういし)が使われている⁽⁴⁰⁾。

大和郡山城、姫路城、福知山城、高取城、和歌山城、津山城など多くの城が転用石を使っている⁽⁴¹⁾。墓石、宝篋印塔、五輪塔、石仏、石臼などである。福知山城では見えるところだけでも450~500個もある。戦略上早急に、築城をしなければならなかったようである。



図17 福知山城の転用石 (H29.1.1撮影)

石垣石積みの分類については、野面積み^{のづら}は、石垣の積み方の初期のものであり、次に打込接ぎ^{うちこみは}が見られ、次に1600年代になると切込接ぎ^{きりこみは}が見られる。図18、19、また後述する図30、31から、それぞれの年代を見



図18 野面積み(松江城) (H27.11.6撮影)



図19 打込接ぎ(松江城) (H27.11.6撮影)

ることができる。

野面積みは、形が不規則なものをそのまま積んだものであり、積んでも限界がある。打込接ぎは、石の加工が大まかに加工されている。切込接ぎは石の接点平面になるまで加工されている⁽⁴²⁾。

図20は津山城で平山城である。城主の森忠政は小高い山の鶴山つるやまを鶴山かくざんと改めて築城した。高さ45m、総面積9.1haある。本丸と二の丸に御殿を置き、建造物は本丸31、二の丸12、三の丸17棟、その他多くの門があり、城内は建造物群で埋まっていたようである⁽⁴³⁾。



図20 岡山県津山城 (H29.10.29撮影)

図21は龍野城であり、室町時代の末期に、鶴籠山山頂に築かれていたが、江戸時代になるとすでに天下太平の世となり、幕府の嫌忌に触れることを恐れて、御殿式の築城となっている⁽⁴⁴⁾。



図21 兵庫県龍野市龍野城 (H29.10.29撮影)

図22は熊本城であり、加藤清正が石工集団を駆使して築城した。徐々に傾斜がきつくなる、武者返しの石垣が見事であり、熊本地震にも耐えた石垣は有名である。石垣の頂上近くになると、角度はほぼ垂直になっているのがわかる。



図22 熊本県熊本市・熊本城 (H28.7.11撮影)

(3) 革新的な城・平城・水城

平城は、城の近くの川・沼・堀・池などを利用して、築いている。また、水田や城下町なども巡らせて構えているのが特徴である。築城技術の向上が可能にした、近世の城をいう。

水城は、海や湖を天然の堀として築城されたものをいう。海や湖に隣接した地形や島などを利用して、海水や湖水を引き込んで、防御を固めている。海城・湖城・沼城などとも呼ばれている⁽⁴⁵⁾。

図23は高松城であり、別名「玉藻城」とも言われ、海水を引き込んだ日本初の海城である⁽⁴⁶⁾。城内には軍船も行き交うことをしていたようである。



図23 香川県高松市・高松城 (H29.2.10撮影)

図24は広島城で、毛利輝元により1599年（慶長4年）に築城された平城である。低地で水攻めにされるなど要害が悪いと言われるが、「要害が悪い城だからこそ安全」と考えられた⁽⁴⁷⁾。



図24 広島県広島市・広島城 (H29.8.3撮影)

石は軽いものや加工しやすいものは適しない。そのため、火山岩系の安山岩や花崗岩が用いられることが多い⁽⁴⁸⁾。そこで、瀬戸内海沿岸の石は適していた⁽⁴⁹⁾。秀吉の大坂城の石が、瀬戸内海の小豆島から運ばれているのはその良い例である。

石の切り出しには、掘り出しやすくしたり、形を整

えたりするために、図25～27のように矢穴が空けられている。ノミで穴を開けて石の割る方向に溝の列を作り、次にタガネを入れて玄能で割っていくと、きれいな断面になっていく。この矢穴工法跡が城づくりの石垣石に見られる。



図25 松山城 (H28.11.26撮影)



図26 松江城 (H27.11.6撮影)



図27 津山城
(H28.11.16撮影)

図28は、豊臣秀吉が築いた大坂城であるが、当時の遺構はすべて埋没している。豪華絢爛の様子や防御するには難攻不落の様子がよくわかる。



図28 大阪府・大坂城 (H28.8.7撮影)

図29は、慶長8年(1603年)に征夷大將軍になった徳川家康が築城した江戸城である。江戸幕府安泰の264年間をもたらした、日本屈指の巨大城郭である。

1633年(寛永10年)には、「一国一城令」が出された。これはいわゆる城郭統制であり、江戸幕府からの西国大名に対する牽制であったろうと考えられている。平和な時代になると、石垣石の表面を図30、31のように加工している。これは「江戸飾り」と言い、時代の



図29 東京都・江戸城 (H29.8.6撮影)



図30 切込接ぎ (江戸城)
(H29.8.6撮影)



図31 算木積み (江戸城)
(H29.8.6撮影)

安泰とともに次第に装飾が、見られるようになってくる⁽⁵⁰⁾。

5 琉球王国のグスク(城)

(1) 世界遺産に登録されたグスク

沖縄県は、1879年(明治12年)の廃藩置県により「琉球藩」から「沖縄県」に名称変更となった。1429年(第一尚氏王統・室町時代)に尚巴志が琉球(沖縄本島)を統一したので、その間の約450年間に琉球王国であった。日本をはじめ、中国・朝鮮・東南アジアの国々と貿易や各種の文化を取り入れることにより、独自の「琉球文化」を生み出している⁽⁵¹⁾。

2000年(平成12年)には、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」が、ユネスコの世界遺産に登録された。5つのグスクと4つの遺産群である。沖縄県教育委員会は5つのグスクについて、小・中・高校生用の副読本を作成している⁽⁵²⁾。そして、その副題を次のように紹介しているので、概要をつかむことができる。

○今帰仁城跡

中学生用 ～威風堂々たる屈指の名城～

高校生用 ～北部王国の拠点～

○座喜味城跡

中学生用 ～城壁の美しいグスク～

高校生用 ～美しい砦～

○勝連城跡

中学生用 ～勝連の英雄、阿麻和利の居城～

高校生用 ～阿麻和利の夢の跡～

○中城城跡

中学生用 ～城づくりの名人の最高峰のグスク～

高校生用 ～ペリーの部下もたたえた名城～

○首里城跡

中学生用 ～グスクの中のグスク～

高校生用 ～グスクの中のグスク～

沖縄県のグスクの特徴は、九州以北の城の形態とは少し違うようである。石垣の構築技術は、中国と朝鮮など大陸の影響が見られ、これを琉球独自のものに行っている⁽⁵³⁾。

石材は石灰岩であるが、グスクの立地場所により材質が違うため、個性のある石垣が組まれている。また、石積みは大きく分けて3種類の積み方があり、図32、33は、野面積みから、布積み、相方積みで組み立てられており、次第に年代を追って、工法が発達しているのがわかる。



図32 布積み（今帰仁城）
(H28.9.21撮影)

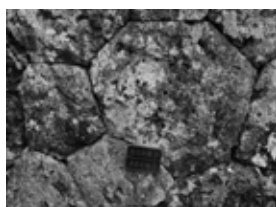


図33 相方積み（首里城）
(H29.9.21撮影)

(2) 今帰仁城

図34の今帰仁城は、1492年(第二尚氏王統・室町時代)に琉球に統一王朝が樹立されるまでの、三山時代(北山、中山、南山)の内の北山を治めた国王の居城である⁽⁵⁴⁾。築城は13世紀頃と言われており、1300年代(三山時代・室町時代)～1400年代(第一尚氏王統・室町時代)の初め頃に今の形になったそうである⁽⁵⁵⁾。図のように、延長は1,500mにもなり、城壁の高い所は6mという規模の雄大な石垣が残っている⁽⁵⁶⁾。大隅と外郭の石垣が屏風の曲線を描いており、沖縄県内の屈指の名城と言われるとおり、縄張りに圧倒される。



図34 今帰仁城の外郭とアーチ状の城門
(H29.9.21撮影)

(3) 座喜味城

図35の座喜味城は、15世紀の初め頃、有力な武将の護佐丸によって築かれたものである⁽⁵⁷⁾。名護層(赤褐色土)を土台とした、標高約120mの丘の上に位置しており、二つの郭(かこい)からできている。沖縄本島の多くのグスクは硬い石灰岩の岩盤の上に建てられているが、座喜味城は赤土の台地の上に建てられている⁽⁵⁸⁾。

石積みは主に石灰岩の布積みであるが、強度の高い相方積みを取り入れたことで、強固な城壁となっているのがわかる。また、門は琉球最古と言われる、図のような、アーチ門が取り入れられている。アーチ門のくさびは中国から伝来してきたものである⁽⁵⁹⁾。

座喜味城の北側には長浜港があり、中国や南方の国々との貿易をしていたので、中国製の食器などが出土している⁽⁶⁰⁾。



図35 現存するアーチでは最古の石門と石垣
(H28.9.20撮影)

(4) 勝連城

図36の勝連城は、琉球王国の王の権力が安定していく中で、国王に最後まで抵抗した有力按司であった阿麻和利によって築かれた⁽⁶¹⁾。阿麻和利は、1458年(第一尚氏王統・室町時代)に国王の重臣であり中城城に居城の護佐丸を滅ぼし、王権を奪おうと国王の居城である首里城を攻めたが大敗して滅亡した⁽⁶²⁾。そして、

首里城を中心とした中山の王権は安定した⁽⁶³⁾。

グスクは勝連半島の丘陵上に立地している。海岸には海外貿易の拠点となった港がある。このグスクの特徴は、建物の屋根に瓦を使っている。琉球時代には、瓦を使っていたのは首里城・浦添城と、この勝連城だけであったようである⁽⁶⁴⁾。城跡からは、日本や中国、朝鮮、東南アジアで作られた陶器や装飾品が、出土している⁽⁶⁵⁾。外国との貿易を行っていた勝連はかなり繁栄し、琉球の中でも強大な力を持っていた⁽⁶⁶⁾。

図36のように、勝連城の各曲輪を結ぶ石階段は、城壁に沿うように右旋回になる構造である。また、一の曲輪階段は、敵の侵入を一挙にできないようにするとともに、勾配がきつくなり、階段幅が狭くなるので、体力の消耗と少ない兵力でも戦う工夫が見られる。

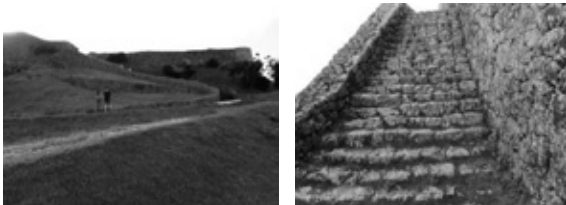


図36 右旋回の階段と一の曲輪階段 (H28.9.20撮影)

(5) 中城城

図37の中城城は、沖縄本島中部の台地の上に築かれている。城壁は自然の岩盤も利用して、琉球石灰岩が使われている。このグスクが、いつ頃建てられたかははっきりわからないが、1400年代前半（三山時代・室町時代）には護佐丸が座喜味城から移り住み、グスクを拡大していったようである⁽⁶⁷⁾。

石積みが野面積み・布積み・相方積みなどによるところから、一時期に築かれたのではない。一の郭と二



図37 城壁とアーチ門 (H28.9.20撮影)

の郭は布積み、三の郭は相方積みで、城門のうち正門は櫓門と考えられ、図37のように一の郭、二の郭、北の郭には城壁と一体に作られたアーチ門がある。

(6) 首里城

図38の首里城は、規模の大きさや豪華さ、そして建物の多さからいってもひととき目立っている。世界遺産に登録された今帰仁城、座喜味城、勝連城、中城城が、統一王国形成の中でその役割を終えていったが、首里城は琉球国王の居城として、約450年もの間、王国の政治・文化・外交の中心地であった⁽⁶⁸⁾。

しかし、首里城がいつ頃建てられたのかはわからないが、尚巴志（1372年～1439年）が中山、北山、南山を滅ぼして沖縄本島を統一して、琉球王国を樹立した頃には、歴史の表舞台に登場していたようである⁽⁶⁹⁾。場内の施設は正殿を中心にその前に、御庭と呼ばれる広場があり、左右に北殿と南殿が向き合っている。この御庭は特別な広場であり、国王の即位式や中国使節団を歓迎する芸能祭など、琉球王国の高い文化を誇示する、さまざまな絵巻物が繰り広げられた、舞台であった⁽⁷⁰⁾。

このように首里城正殿は、沖縄県最大の木造建築物ということだけでなく、日本と中国の建築様式を取り入れた当時の人々の知恵と、沖縄文化の独自性がよく表れているものである⁽⁷¹⁾。



図38 首里城内の施設の様子 (H28.9.21撮影)

6 おわりに

本研究は、城郭の変遷についての研究であり、それは、小学校6年生の社会科における歴史学習の中の、城郭史についてであった。小学校の学習では、各時代毎における概要を項目毎に学習することであり、どれかある項目を絞って、城郭史についての時代を越えた学習にならない。そのため、どうしても連続した学習に繋がらない傾向になってくる。つまり、時代ごとの点と点のみの学習となってくるので、時代と時代をつなぐためにはどうしたらよいかということで、城郭についてはどうかと取り上げたものである。

教科書会社の中には、最初は城郭について詳しく取り上げているが、いつの間にか次第にほとんど取り上げられていない教科書も見られる。それを改善するためには、指導者が多くの資料を持って繋げていく事が求められる。そのためには、事実関係の裏付けとなる時代毎の資料収集が必要となってくる。そういう意味での成果は見られた。

しかし、多くが西日本の城郭についてであり、例を挙げると、大和朝廷時代の東北地方の城柵についての調査ができていないのが課題である。今後は東日本の調査と、授業実践を通じてのカリキュラムの編成についても、探求していきたいと考えている。

引用文献

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』、2017、p.97
- (2) 同上、pp.109-110
- (3) 佐賀県教育委員会『吉野ヶ里遺跡』、2014、p.2
- (4) 同上、pp.9-10
- (5) 同上
- (6) 佐賀県教育庁文化財課『弥生時代の吉野ヶ里』、2014、pp.13-15
- (7) 前掲(3)『吉野ヶ里遺跡』、pp.9-10
- (8) 同上、pp.15-16
- (9) 前掲(6)『弥生時代の吉野ヶ里』、pp.42-43
- (10) 同上
- (11) 小和田哲男『戦国の城』、学研M文庫、2013、pp.22-34
- (12) 村上幸雄・葛原克人『古代山城・鬼ノ城を歩く』、吉備人選書、2002、pp.139-142
- (13) 同上、pp.142-147
- (14) 総社市教育委員会『甕った天空の城鬼ノ城』、2013、p.2
- (15) 同上、p.3
- (16) 同上
- (17) 前掲(12)『古代山城・鬼ノ城を歩く』、pp.18-22
- (18) 前掲(14)『甕った天空の城鬼ノ城』、p.3
- (19) 同上、pp.11-12
- (20) 同上、p.11
- (21) 前掲(12)『古代山城・鬼ノ城を歩く』、pp.114-115
- (22) 同上、pp.24-26
- (23) 同上
- (24) 前掲(11)『戦国の城』、pp.22-23
- (25) 同上、pp.68-78
- (26) 藤原清貴『歴史REAL日本の城』、洋泉社、2015、pp.36-37
- (27) 津山市教育委員会『美作国の山城』、2010、pp.297-299
- (28) 前掲(26)『歴史REAL日本の城』、p.21
- (29) 同上、pp.72-73
- (30) 前掲(11)『戦国の城』、pp.152-160
- (31) 同上
- (32) 栗原紀行『日本の名城を巡る』、三栄書房、2017、pp.58-59
岡本八重子『名城をゆく18備中松山城』、小学館、2015、pp.4-7
- (33) 『日本史大事典1』平凡社、1992、p.200
- (34) 栗田純司『津山城と石垣』、講演会資料、2016、p.2
- (35) 島崎晋他『日本の名城』、洋泉社、2017、p.76
- (36) 穴太衆石垣石積継承者栗田家14代当主
- (37) 太丸伸章『熊本城』、学習研究社、1994、pp.58-63
- (38) 大山邦興『名城をゆく福知山城田辺城』、小学館、2004、pp.6-9

- (39) 湯原公浩『今むかし日本の名城88西日本編』平凡社、2012、pp.14-15
- (40) 中井均『よみがえる日本の城19福知山城』学習研究社、2005、pp.40-43
- (41) 三浦正幸『城づくりのすべて』学習研究社、2006、pp.48-49
- (42) 前掲 (26)『歴史REAL日本の城』、pp.66-67
- (43) 津山市教育委員会『津山城資料編解説』、2002、pp.24-27
- (44) 西ヶ谷恭弘『鳥瞰イラストで甦る日本の名城』、世界文化社、2011、pp.142-143
- (45) 新井邦弘『よみがえる日本の城13高松城』、学習研究社、2005、pp.10-11
- (46) 同上
- (47) 島崎晋『凸凹地図で読み解く日本の城』、評論社、2016、pp.106-107
- (48) 前掲 (11)『戦国の城』、p.162
- (49) 同上
- (50) 三浦正幸『日本史1000城』世界文化社、2012、p.81
- (51) 豊見山和行『琉球・沖縄史の世界』、吉川弘文館、2003、pp.100-105
- (52) 沖縄県教育庁文化課『よみがえる琉球の記憶』、小学生高学年用世界遺産副読本沖縄県教育委員会、2002
 沖縄県教育庁文化課『もっと知りたい世界遺産』
 中学生用副読本沖縄県教育委員会、2002
 沖縄県教育庁文化課『世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群』』
 高校生用副読本沖縄県教育委員会、2004
- (53) 今帰仁村教育委員会『世界遺産今帰仁城跡』、2002、pp.6-9
- (54) 同上、pp.32-33
- (55) 同上
- (56) 前掲 (52)『よみがえる琉球の記憶』、p.18
- (57) 中城村役場『護佐丸クロニクル』、2017、pp.6-7
- (58) 同上、p.7
- (59) 前掲 (52)『よみがえる琉球の記憶』、pp.20-21
- (60) 同上
- (61) 前掲 (52)『世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群』』、p.8
- (62) 同上
- (63) 同上、pp.8-10
- (64) 佐久田繁『琉球王国の歴史』、月刊沖縄社、1999、p.32
- (65) 前掲 (52)『よみがえる琉球の記憶』、pp.24-25
- (66) 同上
- (67) 前掲 (57)『護佐丸クロニクル』、pp.8-12
- (68) 前掲 (52)『世界遺産「琉球王国のグスク及び関連遺産群』』、p.10
- (69) 前掲 (52)『もっと知りたい世界遺産』、p.8
- (70) 岡田輝雄『名城をゆく26首里城』、小学館、2004、pp.6-10
- (71) 登城倶楽部『見たい、知りたい！日本の城』、知的生き方文庫、2016、pp.174-177